

紫溟吟社俳句 : 俳句 : 文苑

著者	蕉夢, 萩路, 竹洲, 石鹿, 松村, 雲涯, 南水, 諫江, 鯨浦, 草江, 旭洲, 奇瓢, 落葉, 紫川, 千江
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 5
ページ	7 4 - 7 6
発行年	1899-11-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/5432

硯友會兼題

題蘆雁圖

漁舟已歸去、極浦暮煙長、孤雁宿何處、蘆花萬頃霜。

藤井 膽南

湖上步月

遠寺鐘鳴淡靄收、思詩小立斷橋頭、蘋風荷月湖村夕、獨占新涼一味秋。

秋夜讀書

獨、繙、青、史、坐、三、更、秋、氣、壓、燈、一、穗、清、讀、到、霜、臺、吟、月、處、時、聞、過、雁、數、行、聲。

十三夜看月

玲瓏後秋月、賞情與夜長、拜衣與橫槩、千歲有余光。

紫溟吟社俳句

月出て、山路を雪車の下りけり

鷹狩や節婦に祿をたまひけり

裏町の古りたる寺や秋の雨

團栗の額りに落つる山路かな

芒の上に垣倒れたり風の朝

集りてくほみにたまる落葉かな

沙魚釣の堤に居並ふ小春かな

赤蕪菁の葉のみ大きくなりけり

蕉 菰 全 竹 全 全 石 全

夢 路 洲 鹿

武者振の雄々しかりける霞かな
 物賣の店に語るや桐火鉢
 寒垢離の我れはつかしき願あり
 茶袋の凍りて竿にかゝる朝
 湯に入りて輝いとゝ痛みけり
 舌なき雀鳴かぬ蛤となりけり
 鉢叩老いたる僧と若き僧
 火事の鐘遠く聞えて寝かへりす
 堀のわきに炭團干したる小家がな
 寒椿鳥居のわきに咲いて居る
 紅葉散る三の鳥居や車止
 瀬の小川漁るや冬の月
 しぐるゝや池の藻に寄る川鼠
 山茶花の葉はかりなから寺の隅
 納豆を豆腐に塗るや僧の膳
 嶋陰に鯨追ひ込む夕日かな
 貧にして小買の炭の灰となる
 嶋人の物買ひに來る小春かな
 霜枯やからみ合うたる豆の臺
 氷山に鳥の群れ飛ぶ朝日かな
 藥喰其角をなつき翁歎す

全松村 全雲涯 全南水 全江 全浦 全江 全洲 全鄂

村 涯 水 江 浦 江 洲 鄂

十月の星霜飛はすなりにけり
 雪に鎖す幻住庵や 燕 青 汁
 山寨に 女許りの 檜火かな
 小格子に語り寄りたる頭巾かな
 少しはかり寒菊植ゑぬ葱畑
 商人の 悴 持ち ち げり 夷 講
 夜神樂の物喰ふ音や面の内
 奥羽路や西日に少々霰降る
 乾鯉をたゝけは冬の響あり
 風やんで白き鳥来る岩の鼻
 逢戀を河豚と海鼠や鉢の中

雜 報

謹祝天長節

謹んで惟るに、允文允武に渡らせ給ふ我が 大
 君の、御位につかせ給ひてより、早や三十年あま
 り二とせをぞ經たりける。此間、文化日に開けゆ
 きて、その止まるところを知らず、嚮きには、武

威を大八洲の外に示えて、日の本の光は、いよゝ
 外國々に輝き出でぬ。今年はまだ、永く大御心を
 なやまし、條約のこともまことに完成し、殊に
 又、皇儲殿下の御慶事さへ、ま近かになりぬ。げ
 にもめでたき事の極みならずや。かくもめでた
 きをりにしも、天つ日のさし出たまひまけふの
 よき日にあひて、千代八千代の實算を祝し奉る、
 我等臣民のよろこび、何物かこれに加へん。され

全 全 千 全 全 紫 全 全 露 全 全
 江 川 葉